

社員研修

小倉 一純

社会人となって最初に勤務したのが、とある製鉄会社でした。鉄の中でもステンレスを専門に製造する会社です。

ステンレスには実はたくさんの種類があり、少量多品種の製造を得意とする老舗メーカーでした。日本では、ステンレス鋼の草分け的存在としても知られていました。

そんな会社で社員研修がありました。若手社員を集めての寺院修養会です。場所は、北鎌倉の円覚寺でした。三泊四日の日程です。総勢二十名ほどだったと思います。引率は、労務課の係長でした。

夜も明けやらぬ早朝から、草むしりや竹ぼうきを使つての庭掃除、寺院の回廊である板の間を、硬く絞った濡れ雑巾で、四つん這いになりながら走って拭くなど、寝ぼけ眼にはかなり厳しい肉体労働が続きます。

それが終わると今度は一時間半の座禅です。長い線香を二つに折り、その一方に僧侶が火

を付けます。これで四十五分の時間を計ります。前半と後半の二回に分けて座禅修養を行ないます。

座禅はいつてみれば瞑想です。つまりその間、何も考えてはいけません。僅かでも心が乱れると体に現れます。それを僧侶が見て取り、その者の体を「警策」きようさくという板状の棒で叩きます。

僧侶は必ず警策のスペアを数枚持って歩いていました。というのも、背中を打ちつけた瞬間に必ずとっていいほどその警策が折れて飛ぶからです。

——それが痛いなのって。夏場の修行でしたから、僕らは、ワイシャツかTシャツ一枚です。その刺激は、半端ではありませんでした。

座禅が終了すると、いよいよ待ちに待った朝食です。僕はその当番を仰せつかっていました。「飯台看」はんたいかんといいます。要領の悪い僕は

仕事の手順をなかなか呑み込むことができず、間違うたびに、若手僧侶から頬に平手打ちを食らいました。

その朝も前方から平手が飛んで来ます。見れば、彼はまだ二十代後半といったところ。僕と同じ世代です。その割には、自信たっぷりの様子でした。

頬に痛みを感じた次の瞬間、僕は不敵にも彼に反対側の頬を差し出していました。そして、相手の目を見詰め微笑みかけました。

キリスト教の「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」という言葉が僕の脳裏をかすめました。

熱血漢でやり手の若手僧侶の怒りが爆発しました。例えるなら、東大寺南大門の二体の仁王像のようでした。

僕は、人が、あれほど怒った瞬間をそれまで見たことはありませんでした。今から四十年も前の社員研修での思い出です。